



林 光男

一般社団法人東北経済連合会 副会長
エネルギー環境委員会 委員長

「北海道・北東北の縄文遺跡群」の世界遺産登録 東北の観光復興と

「観光」という言葉の語源は中国と言われている。

今から約二千年前の「易経」という儒教の教えを説いた書物の中に「観国之光利用賓于王」という言葉が残っている。

日本語で訓読みをすると「国の光を観(み)るはもって王の賓たるに用いるに利(よろ)し」となる。

観は示(しめ)すという意味もあわせもっており、この言葉が「観光」の語源となると言われている。

当時の中国は、群雄割拠の時代であり、各国の規模は、極めて狭い範囲で、現代の日本の県・市程度の広がりしかなかった。その国の王とは、その為政者・支配者のことであり、また、「光」とは地域の秀でたもの(美しいもの、特色等)を意味する。

そして、「観る」とは単に見るだけではなく、より深い意味をもち「心をこめて」観ることを意味し、「観(しめ)す」という場合の意味も「心をこめて」「誇りをもって」観(しめ)す(示す・みせる)という意味だと解されている。

よって、観光という言葉には、「地域(くに)のすぐれたものを心をこめて多くの人に観(見)せ、また、それを心をこめて観(見)ることによって、人的交流(ふれあい)をはかることは、為政者の大切なつとめである。」と説いている。

本県をはじめ、岩手県、秋田県、北海道の4道県では、平成19年より「北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群」について、世界遺産登録に向けた取り組みを行っている。

縄文文化は、約1万年もの長期間にわたって狩猟、漁撈、採集を生産基盤とし、定住生活によって繁栄・成熟した世界史上稀有な新石器時代の文明であったと言われ、北海道・北東北の遺跡群は、地球上にある文化的地域としては、長期間にわたり継続したことが大変、貴重な遺跡として価値があるとされている。

この貴重な遺跡群を「易経」で言われている観光の視点から想うと、4道県にまたがる秀でた「光」を心をこめて磨き、「観(しめ)す」ことができれば、文化的な意味あいだけでなく、東北の新たな観光コンテンツとしても、大きな話題であり、世界文化遺産・平泉や青森・秋田の世界自然遺産・白神山地も併せるとロングステイ可能な魅力ある観光商品にもなり、秀でた観光資源としての効果は、東北全体の観光業の復興にも大きく貢献するものと期待も膨らむ。

先月、「北海道・北東北の縄文遺跡群」の世界遺産登録に向け、推薦書協議案が文化庁に提出されたとの報道があった。2015年度の世界遺産登録を目指す上で、文化庁からの了承が得られれば、2014年度、イコモス(国際記念物遺跡会議)による現地調査、翌年のユネスコ世界遺産委員会での審査・登録実現というスケジュールとなるため、本年度が重要な1年となる。

東北全体による支援により「北海道・北東北の縄文遺跡群」が世界遺産登録に向けた歩みを進め、東北観光の復興に寄与することに期待したい。

(青森県商工会議所連合会会長・はやし みつお)